

園だより

2025年1月号
2025年1月7日発行



戦争無き年を願って

昨年、日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会）が、ノーベル平和賞を受賞しました。1956年に結成して以来、約半世紀以上、核兵器の廃絶と原爆被害者への国家補償を求めた働きが、世界的に認められたのです。被団協のメッセージは、「二度と広島・長崎の悲劇を繰り返さないために、核兵器のない平和な未来を目指すこと」である。しかし、いま世界の主流となっている安全保障の考え方は、核兵器はあるということが前提の「核抑止」論である。対立する核保有国間において、互いに核兵器の使用を意図的に躊躇（ちゅうちよ）する状況を作り出し、結果として重大な核戦争または核戦争につながる全面戦争が回避される、という考え方である。

本当にそうなるのであろうか？ 今も終わらないロシアのウクライナ侵攻。核保有国であるロシアは、同じ核保有国であるアメリカや NATO（北大西洋条約機構）がウクライナへの支援（具体的には武器の供与など）を強化し劣勢を強いられると、途端に核兵器の使用をちらつかせた。実際に戦争が始まり続けたなかで関係が膠着（こうちやく）してしまうと出口が見えない中で、「核抑止論が正常に働き、核兵器の使用が躊躇されるかどうかは分からない。核兵器を持っている側は、どこかで使う可能性を追求しているのだ。だから、「戦争は絶対に起こしてはならない」が大原則なのであり、「核兵器は存在してはならない」ものなのである。

「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。」（旧約イザヤ書 2 章 4 節）

私たち全てを愛して下さる神は、剣や槍（兵器）を鋤や鎌（農機具）に変えて、平和な世界を構築しろと宣言されます。今年がどんな年になろうが、私たちは、平和を望むものとして、隣人を愛し、神に従い、生きていくものでありたいと思います。

理事長 小磯 満